

宿大類村西遺跡 2

— 建売分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2014

高崎市教育委員会
株式会社アーネストワン
有限会社毛野考古学研究所

例言

1. 本書は、宅地分譲工事に伴う宿大類村西遺跡第2次調査の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市宿大類町字村西1361番地3に所在している。
3. 本調査および整理作業は、事業者・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監理のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、株式会社アーネストワンに負担して頂いた。
5. 発掘調査は、高崎市教育委員会の監督のもと和久拓照（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 発掘調査・整理作業は、平成26年7月1日～平成26年10月31日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「605」である。
8. 発掘調査終盤の調査区全景を対象とする空撮は、和久が行った。
9. 本書の執筆については、Iを高崎市教育委員会、その他を和久が行った。
10. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下のとおりである（五十音順、敬称略）。

【発掘調査】

赤尾嘉章 浅川正行 亀田浩子 松井昭光 山本良太

【整理作業】

池内麻美 大塚規子 伴場りく 深谷道子 真下弘美 山口昌子

12. 発掘調査の実施から資料整理・報告書作成にあたっては、次の機関および諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である（五十音順、敬称略）。
- 有限会社スマヤ測量 羽鳥自動車整備工場 倉石広太 関佳弘

凡例

1. 挿入中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。遺物観察表の計測値で用いた単位はcm、kgである。
3. 土器の色調観察は「新版 標準土色帖」（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修2006）を用いた。
4. 土層説明における含有物の量は、多量（50～30%）・中量（25～15%）・少量（10～5%）・微量（1～3%）を基本とし、より高率・多量は「主体」、より低率・少量は「ごく微量」とそれぞれ表記した。
5. 遺物観察表中の法量欄について、推定復元による場合には（ ）、残存値には[]をつけた。
6. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図は国土地理院発行1/200,000地勢図「長野」・「宇都宮」、第4図は、国土地理院発行1/25,000地形図「前橋」・「高崎」を一部改変のうえ引用した。また、本所掲載の地図は、いずれも真上が北である。

目次

例言	IV 基本層序	5
凡例	V 遺構と遺物	7
目次	1 概要	7
I 調査に至る経緯	2 堅穴住居跡	7
II 地理的・歴史的環境	3 井戸跡	7
1 地理的環境	4 土坑	8
2 歴史的環境	5 性格不明遺構	9
III 調査の方法と経過	VI まとめ	21
1 調査の方法	写真図版	
2 調査の経過概要	報告書抄録	

図表目次

第1図 調査区位置図	第9図 土坑	13	第17図 3号井戸出土遺物(3)	19
第2図 高崎市および遺跡の位置	第10図 ビット	14	第18図 大須城址全体図と 今回調査区の位置	23
第3図 周辺の遺跡	第11図 性格不明遺構	15	第1表 周辺の遺跡一覧表	3
第4図 基本層序	第12図 1号住居跡出土遺物	16	第2表 ビット一覧表	10
第5図 調査区全体図	第13図 土坑・ビット出土遺物	16	第3表 出土遺物集計表	15
第6図 1号住居跡(1)	第14図 2号井戸出土遺物	17	第4表 出土遺物観察表(1)	20
第7図 1号住居跡(2)	第15図 3号井戸出土遺物(1)	17	第5表 出土遺物観察表(2)	21
第8図 井戸跡	第16図 3号井戸出土遺物(2)	18		

写真図版目次

PL.1 調査区付近より 大須城址一帯を望む 調査区周辺の新旧航空写真	PL.4 2号井戸 2号井戸 遺物出土状況 3号井戸 3号井戸 遺物出土状況(1) 3号井戸 遺物出土状況(2) 3号井戸 遺物出土状況(3) 3号井戸 遺物出土状況(4) 3号土坑	P-15 遺物出土状況 P-16 PL.6 1号不明遺構 表土掘削状況 作業状況 調査区近隣にある 大須城址関連の石碑 宿大須町公民館敷地内の 案内看板
PL.2 調査区全景 1号住居跡周辺 1号住居跡	PL.5 4号土坑 5号土坑 遺物出土状況 P-1~3 P-2 遺物出土状況 P-4 P-4 セクション	PL.7 1号住居跡出土遺物 2号井戸出土遺物 土坑・ビット出土遺物
PL.3 1号住居跡 セクション 1号住居跡 床下土坑 1号住居跡 遺物出土状況(1) 1号住居跡 遺物出土状況(2) 1号住居跡 遺物出土状況(3) 1号住居跡 遺物出土状況(4) 1号井戸 1号井戸 セクション		PL.8 3号井戸出土遺物

I 調査に至る経緯

平成26年4月14日、株式会社アーネストワン（以下事業者）より分譲建設に伴う文化財保護法93条の発掘届けが高崎市教育委員会（以下市教委）に提出された。市教委は、開発計画と埋蔵文化財保護との調整を図るために試掘調査が必要な旨を回答した。

同年4月18日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年4月30日に工事予定地の試掘調査を実施し、平安時代～中世の遺構・遺物を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということなので、開発予定地の内、上下水道設置による掘削建設部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成26年6月11日付けで高崎市教育長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成26年6月12日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 調査区位置図

■：開発予定地 ■：調査範囲

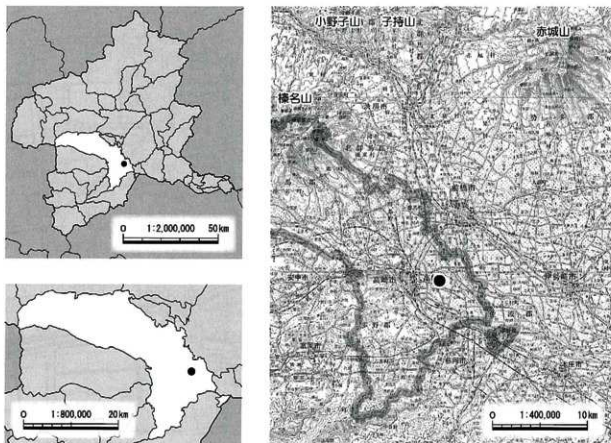
II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

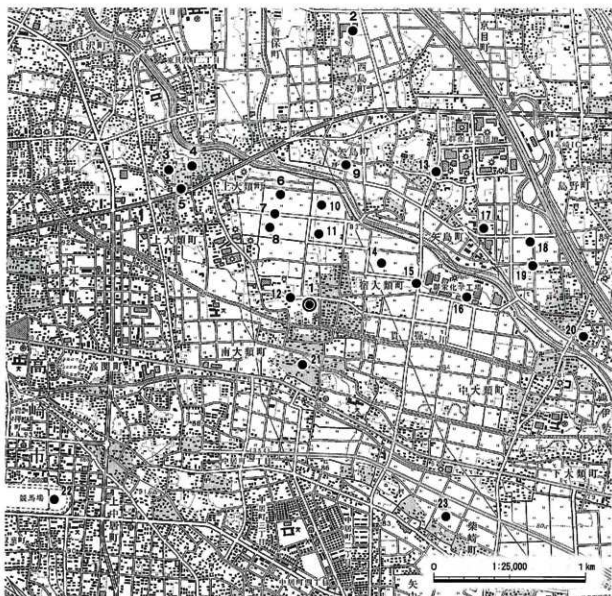
宿大類村西遺跡の今回調査地点は、J R高崎駅の東北東約54km、関越自動車道高崎 I Cの西南西約1.9kmに所在する。地形地域区分上は、前橋台地と高崎台地の間にはさまれた井野川低地の北西部にあたる。井野川右岸からは1km弱南、同川の走向に沿って帯状に形成された微高地上に位置している。100mほど南を一貫堀川が東流し、2km足らず先で井野川に合流する。井野川はまた、調査区の北北西にある合流地点にて染谷川を迎え入れ、高崎市域の東南端で烏川に注ぐ。遺跡地付近の現地表面の標高は85m前後、遺構確認面においては84.3～84.4mを測り、旧地形は南東方向がわずかに低い緩傾斜をなす。本遺跡周辺は、微高地と、それよりわずかに標高の少ない低台地が混在する。調査区至近においては、微高地を利用した畑が多くを占め、それらを低台地の水田がとり囲むような様相を呈している。

2 歴史的環境

井野川流域はかねてより遺跡の宝庫と呼ばれており、本遺跡周辺も、縄文時代から中世にかけての遺跡を多数擁している。こと宿大類地区の知見については、昭和57(1982)年度から5年計画で行われた、圏場整備事業に伴う一連の発掘調査の成果に拠るところが大きい。以下、各時代の主要な調査事例の概略を記す。〔縄文時代〕増殿(9)、山島・天神(14)、万相寺(16)の各遺跡にて住居跡をはじめとする集落跡が確認されている。中期後葉に相当する例が多い。万相寺遺跡では、敷石住居跡と竪穴住居跡が1軒ずつ検出され



第2図 高崎市および遺跡の位置



第3図 周辺の遺跡

No.	遺跡名	内容	時代
1	宿大須村西	集落、城館	縄弥古奈平中
2	西島遺跡群	水田	古平
3	北宅地	集落、墳墓	弥古
4	新井屋敷跡	城館	中
5	長井三河屋敷跡	城館	中
6	天田・川柳	散布地、集落、水田	縄奈平中
7	天田館址	城館	中
8	天田Ⅱ	集落、水田、城館	奈平中
9	増殿	集落	縄古
10	村北館址	城館	中
11	村北・矢島前・村東	集落、水田、城館	奈平中
12	大須城址	城館	中

No.	遺跡名	内容	時代
13	竹之内	散布地	弥
14	山島・天神	集落、水田、墳墓	縄奈平中
15	天神久保	集落、水田	平
16	万相寺	集落、墳墓、水田	縄弥古奈平中
17	鈴ノ宮	集落、墳墓、城館	弥古奈平中
18	元島名	散佈地、集落、水田	縄弥古中
19	島名城址	城館	中
20	元島名内出跡	城館	中
21	大須館址	城館	中
22	競馬場	散布地	弥
23	柴崎遺跡群	水田	平
—	—	—	—

第1表 周辺の遺跡一覧表

た。なお、本遺跡の昭和61(1986)年度調査において、前期後葉の諸儀b式およびc式の土器破片少量と、竪穴状遺構1基が検出されている。

〔弥生時代〕竹之内遺跡(13)において、中期に属する土器の散布が知られる。後期になると、北宅地(3)、万相寺、鈴ノ宮(17)、元島名(18)といった、井野川兩岸にほど近い微高地での集落調査例が見られるようになる。北宅地、万相寺、元島名の各遺跡では、方形周溝墓も検出されている。本遺跡の昭和61年度調査では、後期埴式期の竪穴住居跡が12軒検出された。

〔古墳時代〕万相寺、鈴ノ宮で前期、増殿と鈴ノ宮の両遺跡では後期の集落跡がそれぞれ確認されている。また、万相寺と鈴ノ宮にて古墳の調査例が知られる。西島遺跡群(2)では、6世紀代の榛名山二ツ岳の噴火による火山灰で直接覆われた水田跡が広範囲にわたって検出されている。本遺跡の昭和61年度調査では、前期および中期の竪穴住居跡が2軒と、方形周溝墓2基が見つかった。

〔奈良・平安時代〕柴崎(23)、西島、山鳥・天神の各遺跡(群)をはじめとし、本遺跡周辺の随所にて遺構が認められる。本遺跡の昭和61年度調査でも、竪穴住居跡125軒に加え、AsB(浅岡B軽石)下の水田が検出されている。125軒のうち、奈良時代のもは数軒にとどまり、その他すべてが平安時代に属する。弥生時代以来、井野川兩岸至近の微高地に集落が散漫に占地する傾向は長らく続いていたが、平安時代を前期として住居・建物は激増する。濃密な分布域も南北に広がり、本遺跡周辺に及ぶようになる。

〔中世〕他域に比べても、本遺跡周辺では当該期の遺跡が多い。城館跡が主体を占め、島名城址(19)、矢島村西城址(11)、天田館址(7)、村北館址(10)などで発掘調査が実施されている。山鳥・天神、万相寺の両遺跡では、掘立柱建物からなる集落と目される遺構群が見つまっている。大須城址(12)については、本遺跡の昭和61年度調査において二の丸北側以北が対象とされた。その結果、現況面で確認されていなかった複数の堀が検出され、諸郭を入り組ませた複郭式の構造の一端が明らかになった。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

表土除去は、0.25㎡バックホーを用いて行った。表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、適宜ベルト設定および半截を行い、土層堆積状況を記録した。

遺構測量については、トータルステーションおよび電子平板を用いて平面図を作成し、断面図は通り方測量で行った。各測量データはDXF形式に書き出すことによって汎用性をもたせた。なお、座標は世界測地系を使用している。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて行い、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・デジタルカメラ(L200万画素相当)を使用した。

遺物接合は、溶剤系接着剤(セメダインC)を用い、エポキシ系樹脂で部分的に補強した。遺物の写真撮影は、センサーサイズAPS-Cのもの(Nikon D7000)を使用した。遺構・遺物トレース、写真加工、版組はそれぞれAdobe IllustratorCS2、Adobe PhotoshopCS6、Adobe InDesignCS2を使用した。

2 調査の経過概要

現地での発掘調査は平成26(2014)年7月1日～2014年7月12日まで行った。

7月1日 仮設トイレの搬入。重機搬入後、重機による表土掘削。併行して、作業員による調査区周辺の整頓、除草、安全対策などの場内整備。

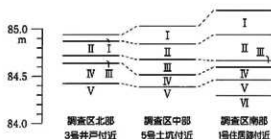
- 7月2日 ジョレンを用いての遺構確認作業。溝状遺構または住居跡の可能性ある箇所の覆土掘削を開始。
- 7月3日 1号住居跡の覆土掘削に着手。
- 7月4日 雨天により作業中止。
- 7月7日 1号住居跡の精査を継続。土坑・ピットの覆土掘削に着手。
- 7月8日 1号住居跡、床面までを完掘。
- 7月9日 大型の土坑3基について、井戸であることが判明。作業の重点を井戸の覆土掘削におく。
- 7月10日 当初、週末にかけて台風の接近が予測されたため、調査区全景の空撮を前倒しして実施。午後、雨天により作業中止。
- 7月11日 台風通過を予測し、掘削作業は休止とし、測量作業のみの稼働とする。
- 7月12日 1号住居跡の掘り方調査、井戸跡3基の覆土中の遺物の記録・回収、および完掘。高崎市教委による調査・記録作業の終了確認後、器材を撤収し、発掘調査の全工程を終了。

IV 基本層序

調査区壁面にかかる形で検出された遺構が多く、基本層序の記録を兼ねたセクション図作成を複数箇所で行った。I層は現代において形成された表土層、II層は盛土層で、いずれも碎石や廃材の破片を大量に含む擾乱土からなる。III・IV層は砂、泥流粒、軽石(As-Bか)、およびシルトの混土層。III層のほうがシルトの含有率が高く、色調が淡い。V層は比較的含有物の少ない黒褐色土層、VI層は橙色に近い泥流シルト土層である。

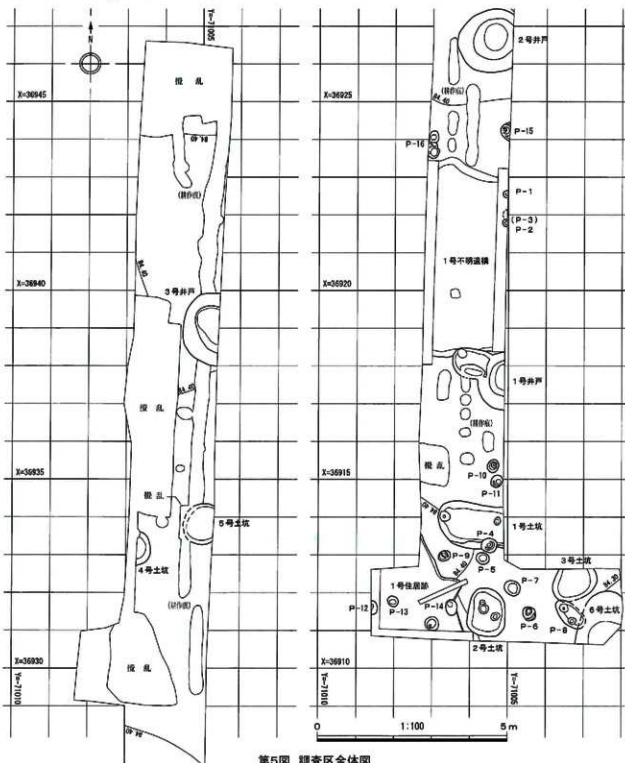
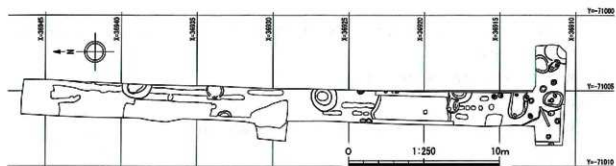
検出されたいずれの遺構も、V層またはそれより上層の土を掘り込んで構築されている。したがって、調査時の遺構確認面はV層上位を基本とした。ただし、I・II層に伴う擾乱は総じて深く、前述のとおり旧地形が南東に低い緩斜面であることとあいまって、調査区北部の確認面は、より下位のVI層に設けざるを得なかった。

III～VI層に見られる泥流粒およびシルトは、約24万年前に流下した前橋泥流、あるいは13～12万年前に発生の高崎泥流に由来するものと考えられるが、いずれとも特定できない。III・IV層の泥流粒は、攪拌の作用を受けていることが明らかで、中世城館跡の一角である当地の消息から、当該層の堆積過程に人為が介在した可能性を考慮すべきかもしれない。なお、調査地点において、As-Bの一次堆積、およびHr-FA、As-Cなどの堆積は確認されなかった。



- | | |
|----------|---|
| I 灰色土 | 粘性弱い、しまり強い。碎石からなる表土層。上下2層に細分できる。 |
| II 褐色土 | 粘性強い、しまり強い。様々な擾乱土からなる盛土層。 |
| III 褐灰色土 | 白色軽石粒(径2～6mm)を少量、炭化物粒(径1～2mm)をごく微量含む。粘性やや強い、しまりやや強い。下層に炭分の沈着あり。地点により、色調の淡い上位のa層、下位の濃いb層に細分できる場合がある。 |
| IV 灰褐色土 | 白色軽石粒(径2～6mm)を中量、シルトおよび炭化物粒(径1～2mm)をごく微量含む。粘性普通、しまりやや強い。 |
| V 黒褐色土 | 黄褐色のバミス(径2～6mm)を微量、シルトを微量含む。粘性、しまりとも普通。 |
| VI 黄褐色土 | シルトを主体、黄褐色のバミス(径4～10mm)を少量含む。粘性強い、しまり普通。 |

第4図 基本層序



第5図 調査区全体図

V 遺構と遺物

1 概要

今回の調査で、竪穴住居跡1軒、井戸跡3基、土坑6基、ピット16基、性格不明遺構1基が検出された。竪穴住居跡のみ10世紀前半に属し、その他の遺構のほとんどは中世において構築・利用されたものと考えられる。各遺構の分布状況のうち、井戸跡3基については、南北におおむね等間隔に配置されたようすが明らかであり、あらかじめ規格性をもって構築されたことが分かる。ただし、3基が同時に機能していたのか、相前後して構築・廃絶されたものかは確然としない。このほか、調査区のほぼ全域にわたり、耕作に伴うとみられる溝状の細くほみが南北に走っているが、これはすべての遺構より新しく、埋没土の一部にガラスやプラスチックの細片を含んでいるため、近代以降の所産とみなし、調査・記録の対象から外してある。

住居跡では、土師器、須恵器、および羽釜が覆土下層ないし床面付近から出土した。また、井戸跡の覆土より石臼や板磚、瓦、ピットの覆土からはカワラケ、双方から軟質陶器の内耳鍋が見つかっている。カワラケや内耳鍋の製作年代が示す時期幅は15世紀後半～16世紀前半となり、この幅は中世の当地における利用時期の範囲内に収まるものと考えうる。

なお、本章の文中では、ピットを対象とせず、「ピット一覧表」(第2表)に所見をまとめ、残存状態がよい、または遺物を伴う例のみ個別の図と写真を掲載した。各遺構の出土遺物の数量に関する記述は概略にとどめ、「出土遺物集計表」(第3表)に種別と点数・重量を一括して明示した。また、遺構外出土遺物については、図化にたえうる残存状態のものがなく、「出土遺物集計表」で扱うにとどめてある。

2 竪穴住居跡

1号住居跡 (第6・7、12図、第4表、PL.2・3、7)

位置：X = 36909～36913、Y = -71011～-71007グリッド。平面形態：長方形と推測される。重複：不明。検出範囲においてなし。規模：検出範囲における壁面の長さは288m。残存深度：0.25m。主軸方位：N-66°-E。柱穴：P1とした1基が、住居右奥付近で確認されている。壁周溝：確認されていない。床面の状態：おおむね平坦である。明瞭な硬化面が認められず、残存状態の良い遺物のレベルなども手がかりとして床を認識している。カマド：東(北東)壁中央付近に付設されている。焚き口から煙道までは0.82mを測る。燃焼面と想定される箇所は、明瞭な火床面が残っていないものの、わずかにくぼみ、周辺より焼土粒が多い。煙道は、ゆるやかに立ち上がる。構築材などの痕跡は確認できなかった。遺構埋没状態：シルトを含む黒褐色を主体とした土による自然埋没と推測される。掘り方：シルト、炭化物粒、および焼土粒を含む黒褐色を主体とした土により埋められ、床が構築されている。掘り方の底面は細かな凹凸をもつ。なお、住居北(北西)部において、床下土坑が検出された。検出長0.71m、深さ0.10mを測る。遺物出土状態：床面直上または覆土下層に集中する。平面的には、散在する観がある。時期：平安時代(10世紀前半)と推定される。遺物：須恵器碗、須恵器甕、羽釜が出土している。

3 井戸跡

1号井戸 (第8図、PL.3)

位置：X = 36916～36918、Y = -71007～-71005グリッド。重複：1号不明遺構と重複し、本遺構が新しい。平面形態：井筒部円形。井戸枠が確認されなかったことから、素掘井戸とみられる。開口部は

出入り箇所を特定した柄鏡形に見えるが、実は単なる円形で、別個の浅い土坑を張出部と誤認したものかもしれない。断面形状：底面から井筒上面まで垂直に近い急角度で立ち上がる円筒形で、開口部はゆるやかに開く漏斗状を呈する。規模：全容不詳ながら、開口部の円形部分の推定長軸は約1.6m、張出部に見える箇所の長さは0.84mを測る。残存深度：1.08m。遺構埋没状態：シルトを含む暗褐色ないし黒褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：覆土中、微量の細片が散漫に分布していた。遺物：土師器（土師質土器）の細片9点が出土した。時期：本遺構と規則性をもって並ぶ2・3号井戸の所見にもとづく類推から、中世の所産と判断される。

2号井戸（第8、14図、第4表、PL.4、7）

位置：X = 36925 ~ 36927, Y = -71007 ~ -71005 グリッド。重複：不明。検出範囲においてなし。
平面形態：開口部、井筒部とも円形。井戸枠が確認されなかったことから、素掘井戸とみられる。断面形状：底面から井筒上面まで垂直に近い急角度で立ち上がる円筒形で、開口部はゆるやかに開く漏斗状を呈する。規模：開口部の長軸は約1.8mと推測される。残存深度：1.14m。遺構埋没状態：覆土はシルトを含む土からなる。下層～中層は人為の作用が認められ、上層は自然埋没の感が強い。遺物出土状態：覆土中層と下層から、拳～人頭大の円礫をまじえつつ比較的高密度にて出土した。遺物：軟質陶器の内耳鍋、平瓦、石白など。時期：出土遺物から、おおむね中世において機能し、かつ廃絶された遺構とみられる。

3号井戸（第8、15～17図、第4表、PL.4、8）

位置：X = 36925 ~ 36927, Y = -71006 ~ -71004 グリッド。重複：不明。検出範囲においてなし。
平面形態：開口部、井筒部とも円形。井戸枠が確認されなかったことから、素掘井戸とみられる。断面形状：底面から井筒上面まで垂直に近い急角度で立ち上がる円筒形で、開口部はゆるやかに開く漏斗状を呈する。規模：開口部の長軸は約2.0mと推測される。残存深度：1.08m。遺構埋没状態：人為の作用が顕著といえる。覆土は上層に至るほどシルトの含有率が高く、主に南寄りの斜め上方から投げ込まれたように堆積している。遺物の垂直分布状況もそれに準ずる。遺物出土状態：覆土中層と下層から、拳～人頭大の円礫をまじえつつ比較的高密度にて出土した。覆土の堆積状況と軌を一にし、おおむね南方から投げ落とされたような様相を呈する。遺物：カワラケ、軟質陶器の内耳鍋、石白、板碑などが出土している。時期：詳細は不明ながら、出土遺物からおおむね中世において機能し、かつ廃絶された遺構とみられる。

4 土坑

1号土坑（第9図）

位置：X = 36913 ~ 36914, Y = -71007 ~ -71005 グリッド。重複：P-4と重複し、これより古い。
平面形態：長楕円形、もしくは溝状。断面形状：逆台形を呈する。規模：長軸方向の検出長は1.76m、短軸は1.20mを測る。残存深度：0.30m。遺構埋没状態：シルトを含む暗褐色ないし暗褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：破片1点の出土にとどまる。遺物：軟質陶器内耳鍋の破片1点が出土した。時期：不明。

2号土坑（第9図）

位置：X = 36910 ~ 36912, Y = -71007 ~ -71006 グリッド。重複：なし。平面形態：楕円形。

断面形状：やや不整の逆台形を呈する。規模：長軸1.28 m、短軸1.00 mを測る。残存深度：0.30 m。
遺構埋没状態：シルトを含む暗褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：覆土中、微量が散漫に分布していた。遺物：いずれも破片で、須恵器碗1点、軟質陶器内耳鍋2点が出土した。
時期：不明。

3号土坑（第9図）

位置：X = 36911 ~ 36912, Y = -71004 ~ -71003 グリッド。重複：なし。平面形態：楕円形。
断面形状：逆台形を呈する。規模：長軸約1.3 m、短軸約1.1 mと推測される。残存深度：0.32 m。
遺構埋没状態：シルトを含む暗褐色ないし暗褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：覆土中、散漫に分布していた。遺物：いずれも破片で、須恵器碗2点、土師器甕3点、カワラケ2点が出土した。時期：不明。

4号土坑（第9図）

位置：X = 36932 ~ 36933, Y = -71008 ~ -71007 グリッド。重複：なし。平面形態：円形。断面形状：レンズ状を呈する。規模：残存長にして0.90 mを測る。残存深度：0.07 m。遺構埋没状態：シルトを含む黒褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：遺物は出土しなかった。時期：不明。

5号土坑（第9、13図、PL. 5・7）

位置：X = 36933 ~ 36934, Y = -71006 ~ -71005 グリッド。重複：撒乱により、遺構上部の西側が削られている。平面形態：円形。断面形状：逆台形を呈する。規模：長軸約1.1 m、短軸約1.0 mと推測される。残存深度：0.21 m。遺構埋没状態：シルトを含む暗褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：覆土中、微量が散漫に分布していた。遺物：いずれも破片で、土師器甕とカワラケが各1点、軟質陶器内耳鍋が2点出土した。時期：不明。

6号土坑（第9図）

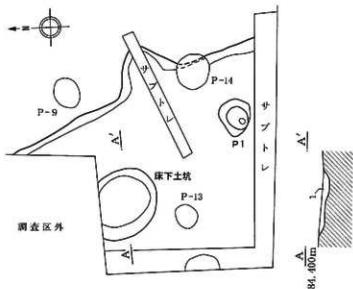
位置：X = 36909 ~ 36911, Y = -71004 ~ -71002 グリッド。重複：P-8と重複し、これより古い。平面形態：楕円形と推測される。断面形状：レンズ状を呈する。規模：検出長は1.76 mを測る。残存深度：0.43 m。遺構埋没状態：シルトを含む黒褐色を主体とした土による自然埋没とみられる。遺物出土状態：遺物は出土しなかった。時期：不明。

5 性格不明遺構

1号不明遺構（第11図）

位置：X = 36918 ~ 36923, Y = -71008 ~ -71006 グリッドにて検出された。重複：1号井戸と重複し、これより古い。平面形態：不明。断面形状：浅いたらい状を呈する。規模：検出長3.52 m。残存深度：0.28 m。遺構埋没状態：人為の介在した可能性がある。覆土はシルトおよび小礫を含む混土からなるほか、採取不能な程度に粉砕された土器類の破片が微量含まれる。微視的な色調に関して箇所ごとの変異が大きい。遺物出土状態：採取可能な状態の遺物は出土しなかった。時期：不明。

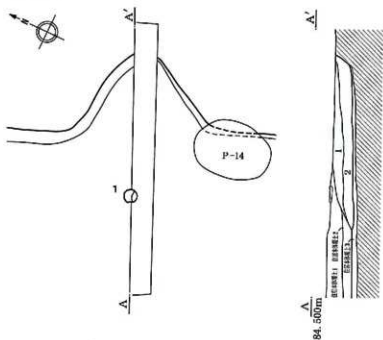
【掘り方】



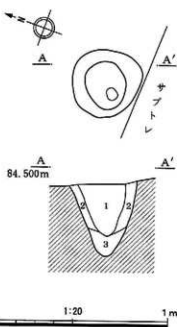
1号住居跡床下土坑 土層説明

1. 黒褐色土 シルト、炭化物粒 (径1-4mm)、および焼土粒 (径1-2mm) をそれぞれを少量含む。粘性やや強く、しまり普通。

【カマド】



【P-1】



1号住居跡カマド 土層説明

1. 暗褐色土 炭化物粒 (径1-4mm) を微量、焼土粒 (径1-2mm) をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 炭化物粒 (径1-4mm) および焼土粒 (径1-2mm) を微量含む。粘性、しまりとも普通。

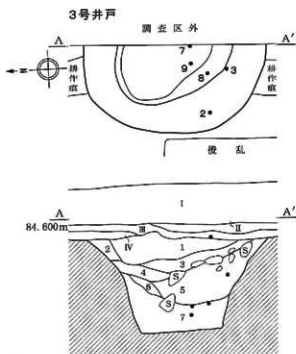
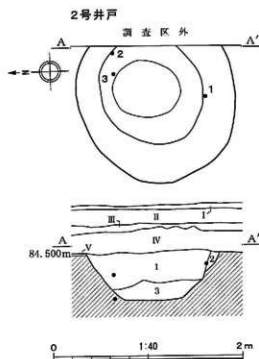
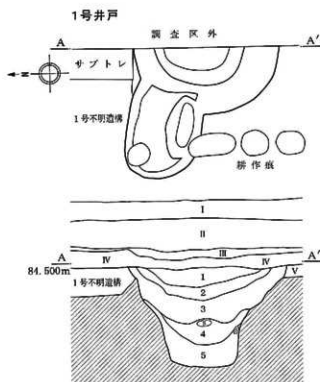
1号住居跡P1 土層説明

1. 黒褐色土 シルトおよび炭化物粒 (径1-4mm) を少量、焼

土粒 (径1-2mm) を微量含む。粘性、しまりとも普通。

2. 黒褐色土 シルトを少量、炭化物粒 (径1-4mm) および焼土粒 (径1-2mm) を微量含む。粘性、しまりとも普通。
3. 暗褐色土 シルトを多量、炭化物粒 (径1-4mm) および焼土粒 (径1-2mm) を微量含む。粘性やや強く、しまり普通。

第7図 1号住居跡(2)



1号井戸 土層説明

1. 黒褐色土 シルト、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 シルトおよび焼土粒(径1~2mm)を少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
3. 黒褐色土 炭化物粒(径1~4mm)を少量、シルトおよび焼土

4. 暗褐色土 径(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。シルト、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ少量含む。粘性、しまりとも普通。
5. 暗褐色土 シルトを中量、砂、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ少量含む。粘性、しまりとも普通。

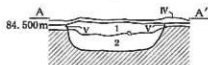
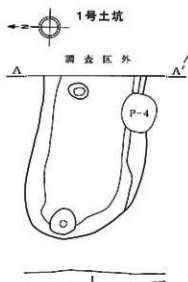
2号井戸 土層説明

1. 黒褐色土 シルトおよび炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗黄褐色土 シルト、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ微量含む。粘性、しまりとも普通。
3. 暗褐色土 シルト、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ少量含む。粘性、しまりとも普通。

3号井戸 土層説明

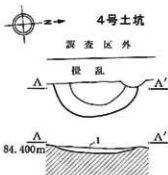
1. 黄褐色土 シルトを主体とし、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりともやや強い。
2. 黄褐色土 シルトを主体とし、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)を少量含む。粘性、しまりともやや強い。
3. 黒褐色土 炭化物粒(径1~4mm)を少量、シルトおよび焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
4. 暗黄褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)を少量含む。粘性やや強く、しまり普通。
5. 暗褐色土 シルトおよび炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
6. 黒褐色土 炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)を少量含む。粘性、しまりとも普通。
7. 暗黄褐色土 シルトを中量、砂および炭化物粒(径1~4mm)を少量含む。粘性、しまりとも普通。

第8図 井戸跡



1号土坑 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを多量、炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

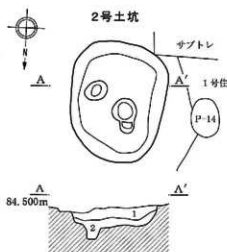


4号土坑 土層説明

1. 黒褐色土 シルトおよび炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。

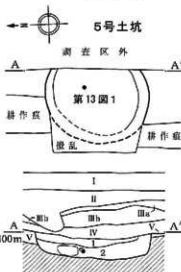
5号土坑 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。



2号土坑 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

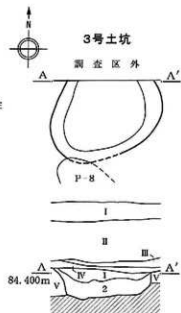


5号土坑 土層説明

2. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

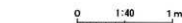
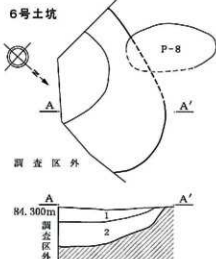
6号土坑 土層説明

1. 黒褐色土 シルト、炭化物粒(径1~4mm)、および焼土粒(径1~2mm)をそれぞれ微量含む。粘性やや強く、しまり普通。



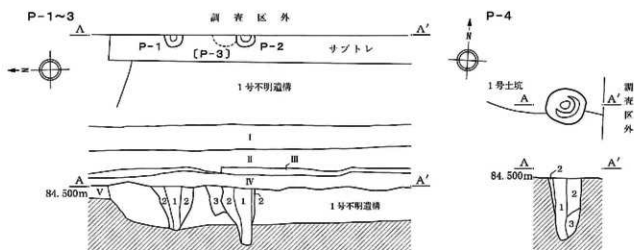
3号土坑 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径2~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径2~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。



2. 黒褐色土 炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)を微量、シルトをごく微量含む。粘性強い、しまり普通。

第9回 土坑



P-1 土層説明

1. 黒褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性やや強く、しまり普通。
2. 黒褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性やや強く、しまり普通。

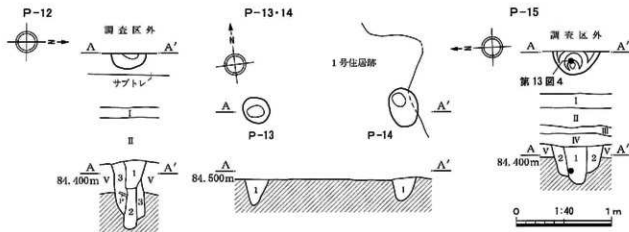
P-2・3 土層説明

1. 黒褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性やや強く、しまり普通。柱状。
2. 黒褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径

- 1~2mm)をごく微量含む。粘性やや強く、しまり普通。
3. 黒褐色土 シルトを微量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性やや強く、しまり普通。

P-4 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性しまりとも普通。柱状。
2. 暗褐色土 シルトを多量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性やや強く、しまり普通。シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性やや強く、しまり普通。



P-12 土層説明

1. 暗褐色土 炭化物粒(径1~4mm)を少量、シルトを微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。
2. 暗褐色土 シルトおよび炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
3. 暗褐色土 シルトを中量、炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。
4. 暗褐色土 シルトを多量、炭化物粒(径1~4mm)を少量、焼土粒(径1~2mm)を微量含む。粘性、しまりとも普通。

P-13 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径

- 1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

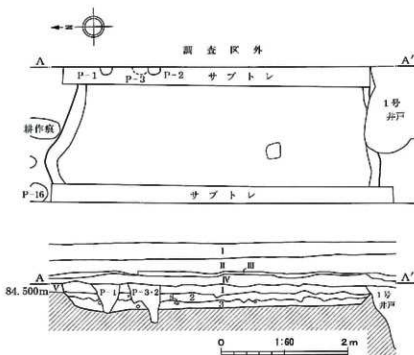
P-14 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)および焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

P-15 土層説明

1. 暗褐色土 シルトを多量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性やや強く、しまり普通。柱状。
2. 暗褐色土 シルトを少量、炭化物粒(径1~4mm)を微量、焼土粒(径1~2mm)をごく微量含む。粘性、しまりとも普通。

第10図 ビット



第11図 性格不明遺構

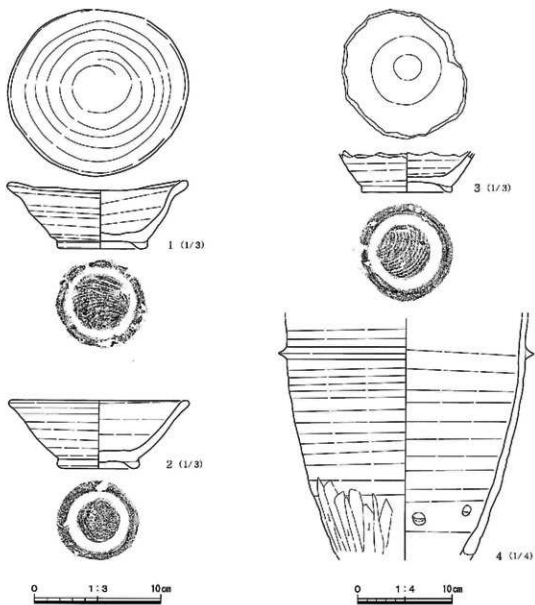
1号不明遺構土層説明

- 1 黒褐色土 黄褐色のバミス(径2~6mm)を微量、シルトを微量含む。粘性、しまりともやや強い。
- 2 暗黄褐色土 シルト、黄褐色のバミス(径4~10mm)、および礫をそれぞれ少量含む。粘性、しまりともやや強い。
- 3 黄褐色土 シルトを中量、黄褐色のバミス(径4~10mm)を少量含む。粘性強く、しまりやや強い。

	土師器	須恵器	羽釜	カワラケ	炊飯陶器	陶器	瓦	石白	瀬戸・信州青	軽石
1号住居跡	点数	5	15	1	—	1	—	—	—	2
	重量	237	621.9	458.4	—	30.9	—	—	—	20.7
1号井戸	点数	6	—	—	3	—	—	—	—	—
	重量	21.3	—	—	7.4	—	—	—	—	—
2号井戸	点数	2	—	—	2	6	—	1	1	—
	重量	4.9	—	—	8.0	219.0	—	125.3	1850.0	—
3号井戸	点数	—	—	—	1	7	—	—	5	4
	重量	—	—	—	14.4	458.1	—	—	14543.7	28434.8
1号土坑	点数	—	—	—	—	1	—	—	—	—
	重量	—	—	—	—	43.9	—	—	—	—
2号土坑	点数	—	1	—	—	2	—	—	—	—
	重量	—	1.0	—	—	14.2	—	—	—	—
3号土坑	点数	3	2	—	2	—	—	—	—	—
	重量	32	11.6	—	3.6	—	—	—	—	—
5号土坑	点数	1	—	—	1	2	—	—	—	—
	重量	2.3	—	—	2.1	56.4	—	—	—	—
P-2	点数	—	—	—	—	1	—	—	—	—
	重量	—	—	—	—	154.8	—	—	—	—
P-5	点数	—	1	—	—	—	—	—	—	—
	重量	—	3.1	—	—	—	—	—	—	—
P-8	点数	—	—	—	2	—	—	—	—	—
	重量	—	—	—	5.3	—	—	—	—	—
P-12	点数	—	—	—	—	1	—	—	—	—
	重量	—	—	—	—	79.8	—	—	—	—
P-15	点数	—	—	—	1	—	—	—	—	—
	重量	—	—	—	52.0	—	—	—	—	—
遺構外	点数	8	3	—	4	4	1	—	—	—
	重量	22.4	7.8	—	6.8	64.4	7.0	—	—	—
合計	点数	25	22	1	16	25	1	1	6	4
	重量	77.8	645.4	458.4	99.6	1,121.5	7.0	125.3	16,393.7	28,434.8

* 重量の単位はg

第3表 出土遺物集計表

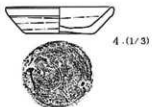


第12図 1号住居跡出土遺物

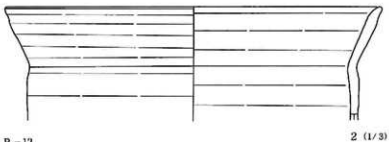
5号土坑



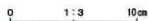
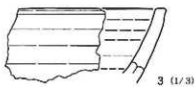
P-15



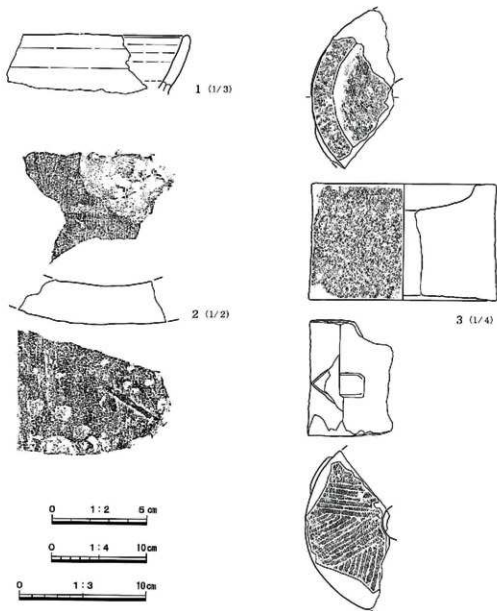
P-2



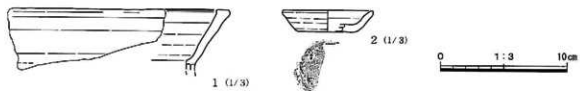
P-12



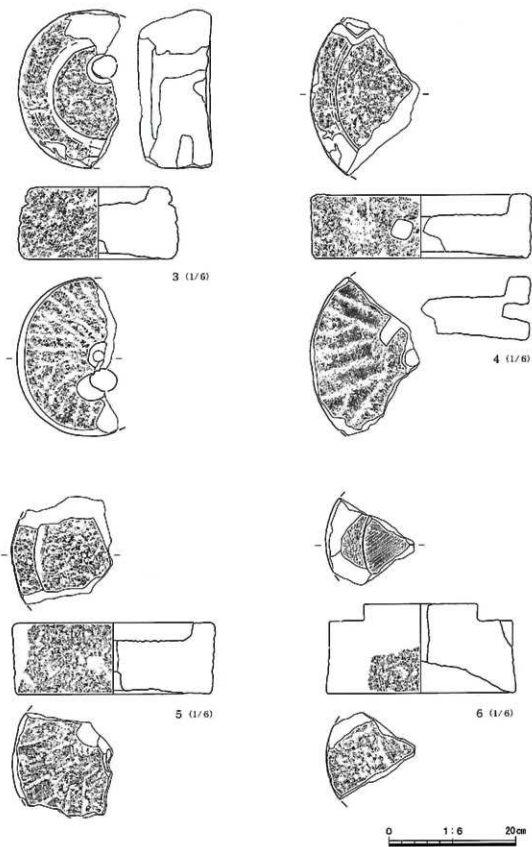
第13図 土坑・ピット出土遺物



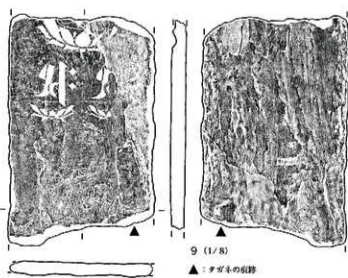
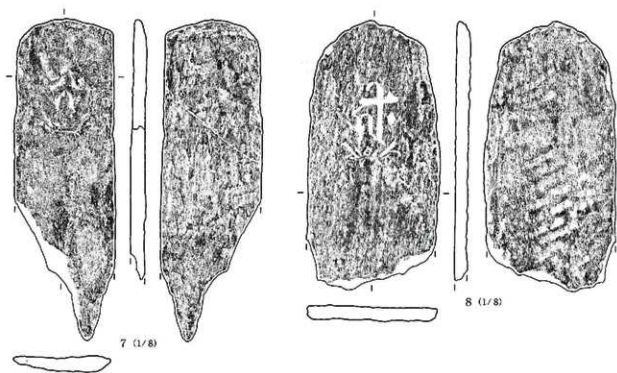
第14图 2号井戸出土遺物



第15图 3号井戸出土遺物(1)



第 16 图 3号井戸出土遺物(2)



第17図 3号井戸出土遺物(3)

1号住居跡

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 甕	口径 14.3 底径 6.8 器高 5.4	①酸化 ②明黄褐色 / 黄褐色 ③赤色粒、白色粒、砂礫 ④ほぼ整形	外面 轆轤整形。底部右回転糸切り後、高台貼付。 内面 轆轤整形。	
2	須恵器 甕	口径 14.3 底径 5.8 器高 5.4	①酸化 ②明黄褐色 / にぶい黄褐色 ③赤色粒、白色粒、砂礫 ④口縁~底部 1/2	外面 轆轤整形。底部右回転糸切り後、高台貼付。 内面 轆轤整形。	
3	須恵器 甕	口径 — 底径 7.0 器高 [3.2]	①酸化 ②灰白色 / 灰褐色 ③赤色粒、白色粒、砂礫 ④体~底部	外面 轆轤整形。底部右回転糸切り後、高台貼付。 内面 轆轤整形。	意図的に口縁付近を打う欠いたもの。
4	須恵器	口径 — 底径 — 器高 —	①酸化 ②灰白色 / 灰白色 ③白色粒、砂礫 ④体部	外面 轆轤整形。胴部縮付。胴部下位程度のヘラナデ。 内面 轆轤整形。四転ナデ。 体部下位に棒状のものを掛けるほぞ穴のような工具痕あり。	筒の復元径、27.0cm。

2号井戸

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	炊煮陶器 内耳甕	口径 — 底径 — 器高 —	①酸化 ②明黄褐色 / にぶい黄褐色 ③赤色粒、白色粒、砂礫 ④口縁部	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。 やや内湾しつつ、胴者に外挿する口縁、断面角頭状の口唇部。	15世紀後半~16世紀前半。
2	瓦 平瓦	幅 — 奥行き — 厚さ —	①良好 ②灰白色 / 暗灰色 ③砂礫 ④端部のない破片	上面、ナデと有目の取縁。 下面、斜格子叩き。	
3	石臼	直径 20.0 高さ 11.3 重量 1.85	茶白・上白。安山岩。約 1/4 残存。挽き手の差し込み口周辺に変形の装飾あり。		

3号井戸

番号	器種	法量 (cm)	焼成	文様等の特徴	備考
1	カラウケ	口径 7.2 底径 4.5 器高 1.7	①良好 ②にぶい黄褐色 / にぶい黄褐色 ③赤色粒、白色粒、砂礫 ④口縁部~底部 1/3	外面 轆轤整形。底部左回転糸切り。 内面 轆轤整形。	15~16世紀。
2	炊煮陶器 内耳甕	口径 — 底径 — 器高 —	①酸化 ②灰褐色 / 黄褐色 ③白色粒、褐色粒、砂礫 ④口縁部破片	外面 回転ナデ。 内面 四転ナデ。 やや内湾しつつ、胴者に外挿する口縁。口唇部の内外が、弱く突出する。内面の突起は、上下に薄い。	15世紀後半~16世紀前半。
特 徴					
3	石臼	直径 25.5 高さ 11.5 重量 5.55	穀白・上白。安山岩。約 1/2 残存。挽き手の差し込み口残存。		
4	石臼	直径 35.0 高さ 10.3 重量 3.90	穀白・上白。安山岩。約 1/3 残存。挽き手の差し込み口、二つ目の子籠穴あり。ものくぼり残存。		
5	石臼	直径 32.1 高さ 11.3 重量 3.00	穀白・上白。安山岩。約 1/5 残存。溝の底、叩き目が顕著。		
6	石臼	直径 30.0 高さ 14.1 重量 1.85	茶白・下白。安山岩。約 1/5 残存。		
7	板碑	長さ 68.2 厚さ 3.5 幅 20.5 重量 7.85	両側縁、下方に向けてやや開き、頭部は丸みを帯びた山形。碇形で、裏面に阿弥三尊像を配す。		
8	板碑	長さ 57.1 厚さ 3.1 幅 28.1 重量 9.50	両側縁、やや開けて並行し、頭部は丸みを帯びた山形。不明瞭であるが、碇形で裏面に阿弥三尊像を配したものとみられる。裏面に斜位の懸崖あり。		
9	板碑	長さ 148.9 厚さ 3.1 幅 31.0 重量 9.82	両側縁、下方に向けてやや開き、頭部は丸みを帯びた山形。不明瞭であるが、碇形で裏面に阿弥三尊像を配す。「正中（または正平）三年（または二年）」の紀年銘。裏面に横位の懸崖あり。破片の下端に、タガネを打ち込んだ彫跡が1か所残存。		

第4表 出土遺物観察表(1)

5号土坑

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	杖貫 陶器 内耳高	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②灰色 / 灰色 ③白色粒、砂粒 ④口縁部破片	外面 刷毛ナデ。 内面 刷毛ナデ。 わずかに内径しつつ器唇に外傾する口縁。口唇部の内側が深く突出する。	15世紀後半～16世紀前半。

P-2

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
2	杖貫 陶器 内耳高	口径 (器高) 底径 — 器高 —	①還元 ②褐色 / 褐色 ③赤色粒、白色粒、砂粒 ④口縁部-底部破片	外面 刷毛ナデ。 内面 刷毛ナデ。 わずかに内径しつつ外傾する口縁。口唇部、環反りぎみにゆれるく屈曲する。	15世紀後半～16世紀前半。

P-12

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
3	杖貫 陶器 内耳高	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②褐色 / 褐色 ③赤色粒、白色粒、砂粒 ④口縁部破片	外面 刷毛ナデ。 内面 刷毛ナデ。 やや内径しつつ器唇に外傾する口縁、断面角面状の口唇部。	15世紀後半～16世紀前半。

P-15

番号	器種	法量 (cm)	①焼成(石材) ②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
4	カワラ ケ	口径 8.6 底径 5.4 器高 2.1	①良好 ②褐色 / 褐色 ③赤色粒、砂粒 ④口縁部	外面 簡稚整形。底部左短縮糸切り。 内面 簡稚整形。	15世紀後半～16世紀前半。

第5表 出土遺物観察表(2)

VI まとめ

1 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は、1号住居跡の1軒のみであった。床面付近にて出土した高台付碗や羽釜の製作年代から、同住居跡は10世紀前半に構築・使用されていたものと推測される。

II章にて既述のとおり、井野川兩岸至近の微高地に集落が低密度で分布する傾向は弥生時代以来長らく続いていたが、平安時代を一大画期として住居・建物の数は激増する。濃密な分布域も南北に広がり、本遺跡周辺に及ぶようになる。本遺跡の昭和61年度調査では、125軒にのぼる竪穴住居跡が検出されているが、そのうち奈良時代のものは数軒にとどまり、その他すべてが平安時代に属する。遺構の燬滅時期という点で、既往調査と今回調査の成果はよく整合しており、近在の集落設営にみる昂揚期の消息を如実に示している。

2 中世の遺構

中世に属する可能性の高い遺構として、3基の井戸跡がまず挙げられる。3基とも、規模や形状が近似し、相互の配置状況に規則性が認められる。

廃絶後の埋没過程について、1号井戸がおおむね自然埋没であるのに対し、2号は人為的に井戸の大半が埋められ、最上位のわずかなくほみが自然に埋没したものと見受けられる。3号は、短時間かつ人為的に埋められたとみられ、遺物が投げ込まれた方向まで推察が可能である。

3号井戸の覆土最上位は、基本層序におけるVI層に由来するシルト主体の黄褐色土で被覆されていた。VI層の土は、井戸の廃絶直後において、当時の生活面を深く削り込まないと得られないものである。3号井戸がVI層の土をふんだんに用いて埋められているということは、ほぼ同時かその直前に、近辺でまとまった

量のV層土が得られるほどの造作が行われたことを意味する。3基の井戸が併存している時期があったことを否定する根拠がない一方、機能停止後の埋まり方については三者三様にて、同時ではなく相前後して廃絶されたものと推測される。また、1基の廃絶後に他の1基が新規構築されるというパターンが想定できるとすれば、3号井戸の覆土最上位にある黄褐色土は、3号の後釜の井戸（さしずめ2号）が掘られた際の発生土である可能性が考えられる。

井戸以外では、16基検出されたピットの大半が、中世に相当するとみなしうる。覆土の色調がそれぞれ似通っており、覆土中の遺物において他時期の混入がごくわずかで、中世所産の純度が高い。

今回の調査区は幅わずか2mであるため、当地に独立柱建物跡が存在していても柱の配列がつかめず、単独のピットと認識されてしまうおそれがある。P-4など、柱痕の明瞭な例が数基検出されており、調査区内になんらかの構造物が設けられていた可能性は考慮すべきであろう。

このほか、1号不明遺構については、当初掘を想定して調査に着手したが、結果、浅く起伏の少ない落ち込みであった。覆土はシルトおよび小礫を含む混土からなるほか、採取不能な程度に粉碎された土器類の破片が微量含まれる。覆土の堆積に人為の介在した可能性があり、地乗跡の一種とも考えうるが、確定には至っていない。

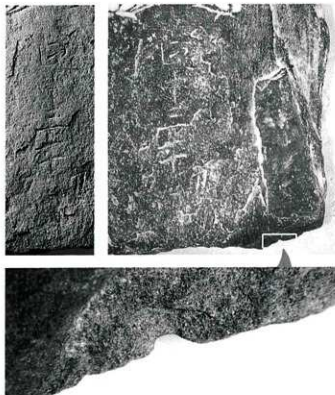
2 出土遺物の概観

1でふれた平安時代住居跡出土の土師器、須恵器、羽釜のほか、中世の遺物として、カワラケ、軟質陶器、瓦、石臼、板碑などが出土・採取されている。最も多く出土したのは軟質陶器(25点)で、石製品を除けば総重量も最大である(1,121.5g)。点数は少ないものの、出土重量では板碑(28,434.8g)と石臼(16,393.7g)がおのずと群を抜く。

カワラケや内耳鍋の製作年代が示す時期幅は、15世紀後半～16世紀前半である。一方、3号井戸の覆土下位にて出土した板碑のうち、第17図9に掲げた板碑には紀年銘が残っており、より具体的な製作年の特定が可能である。結論を先に記すと、14世紀前半から半ばごろにかけての製作で、上述の各種遺物に比べ1世紀あまり古く、大類城の機能時期とも隔たりがある。

紀年銘として、少なくとも4字の存在が確認できる。摩耗・剥落などの作用を若干受けており、明確に判読できない箇所を含む。1字目の「正」(草書体)と4字目の「年」は異論の余地がなく、2・3字目が問題となる。4字全体「正〇〇年」の読み方について、以下のような可能性がある。

(1) 正中三年(1326年)



左右上：紀年銘付近 右上：銘のくはみに片栗粉をすり込んだ状態
下：タガネを打ち込んだ痕跡

3号井戸出土板碑の拡大写真

(2) 正中二年 (1325 年)

(3) 正平三年 (1348 年)

(4) 正平二年 (1347 年)

一見すると(1)の「正中三年」に分があるように思えるが、2字目の「中」が不明瞭で、即断しがたい。また、3字目の「三」は「二」の上に傷がついた結果かもしれない。

なお、実測図や写真にて別途示したとおり、当板碑片の右下にはタガネを打ち込んだ際にできた半円形の痕跡が認められる。このことは、板碑が意図的かつ比較的丁寧に、おそらくは二次利用を前提として破断されたことの証左となるであろう。破断は、井戸に投棄される直前とみるより、そのかなり前に行われたもので、板碑片は礎石や部材などに転用された状態で一定期間機能していたと考えるほうが自然である。

3 今回調査区と大類城址の位置関係

大類城址の城域については、類推可能な箇所が近年まで比較的多かった。終戦直後の空中写真では、水田に囲まれ、畑地、森林、宅地として当該地域の形状や広がりを確認することができる(PL.1)。

今回の調査区は、大類城の一の郭である「本丸」の西隣り、「村西」と称される区域の南～南西部に相当する。二の郭または三の郭にも相当する重要な位置であるが、調査区は、堀や土塁からは若干離れた位置に設定されている。

今回の調査では、平安時代の集落の一部や、城の設営期をさかのぼる板碑の出土をみた。従来の所見では、永祿～天正年間(16世紀半ば～末)に大類城は存

続したとされるが、今回出土した中世遺物は、板碑はもとより、それ以外のものも半世紀前後時間がさかのぼっている。これが大類城の前身たる土地利用の一端を示唆する事象であるのか、今後の資料、調査例の追加をまわって再考を期したい。



『宿大類遺跡群Ⅳ 宿大類町村西遺跡』(高崎市教育委員会 1987) 所収の図を再掲

第18図 大類城址全体図と今回調査区的位置

参考文献

- 高崎市教育委員会 1985 『宿大類遺跡群Ⅳ 村北・矢島前・村東遺跡』
高崎市教育委員会 1986 『宿大類遺跡群Ⅶ 矢島町村西・増殿遺跡』
高崎市教育委員会 1987 『宿大類遺跡群Ⅴ 宿大類町村西遺跡』
群馬県史編さん委員会 1990 『群馬県史 通史編 原始古代Ⅰ』 群馬県
高崎市市史編さん委員会 1994 『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』 高崎市
高崎市市史編さん委員会 1999 『新編 高崎市史 資料編1 原始古代Ⅰ』 高崎市
高崎市市史編さん委員会 2003 『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』 高崎市

写真図版



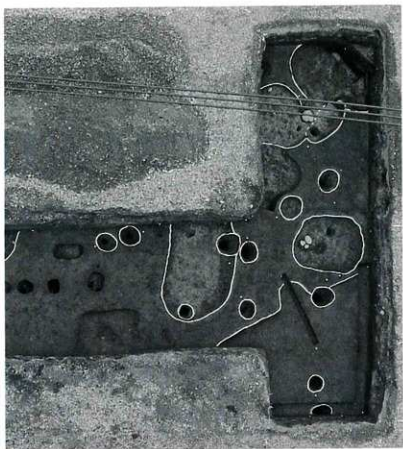
調査区付近より大類城址一带を望む（南から）



調査区周辺の新旧航空写真（左：1947年10月米軍撮影 右：2011年9月国土地理院撮影 ともにS≒1/10,000）



調査区全景（上が北）



1号住居跡周辺（上が東）



1号住居跡（南西から）



1号住居跡 セクション (北東から)



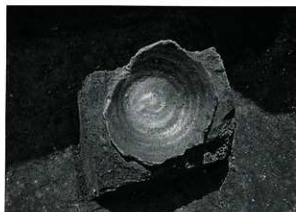
1号住居跡 床下土坑 (南から)



1号住居跡 遺物出土状況 (1) (南西から)



1号住居跡 遺物出土状況 (2) (南西から)



1号住居跡 遺物出土状況 (3) (南東から)



1号住居跡 遺物出土状況 (4) (南西から)



1号井戸 (南西から)



1号井戸 セクション (西から)



2号井戸（北西から）



2号井戸 遺物出土状況（北西から） *左下に石臼。



3号井戸（北西から）



3号井戸 遺物出土状況(1)（北西から）



3号井戸 遺物出土状況(2)（北西から）



3号井戸 遺物出土状況(3)（北西から）



3号井戸 遺物出土状況(4)（西から）



3号土坑（南から）



4号土坑 (東から)



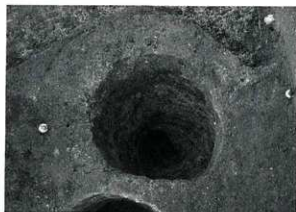
5号土坑 遺物出土状況 (北西から)



P-1~3 (西から)



P-2 遺物出土状況 (西から)



P-4 (南から)



P-4 セクション (南から) * 柱穴が明瞭。



P-15 遺物出土状況 (南西から)



P-16 (南西から)



1



2



3



4

1号住居跡出土遺物



1



|



2



|



3



|



2号井戸出土遺物

〔5号土坑〕



1

〔P-2〕



2

〔P-12〕



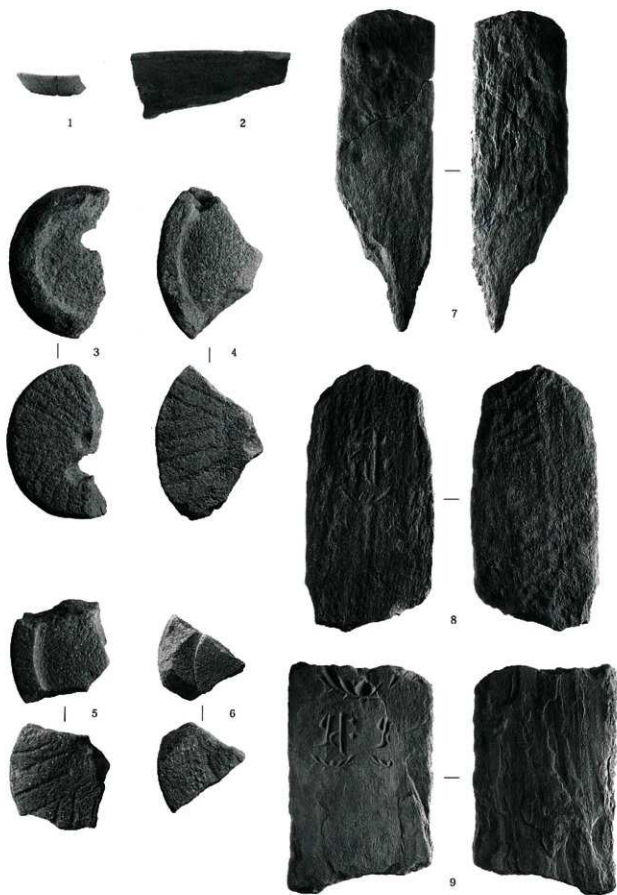
3

〔P-15〕



4

土坑・ピット出土遺物



3号井戸出土遺物

報告書抄録

フリガナ	シュクオオルイムラニシイセキニ
書名	宿大類村西遺跡2
副書名	建売分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第339集
編著者名	和久拓照 田口一郎
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Ⅱ027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	平成26年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
宿大類村西遺跡	群馬県高崎市 宿大類町字 西1361番地3	102020	605	36°33'01"	139°04'25"	20140701 ～ 20140712	90.6㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿大類村西遺跡	集落 城館	平安時代 中世	住居跡 1軒 井戸 3基 土坑 6基 ピット 16基 性格不明遺構 1基	土師器 須恵器 羽釜 軟質陶器 カワラケ 石臼 板碑	大類城設営前の10世紀前半に属する竪穴住居跡と、大類城成立期以降の井戸3基を検出。3号井戸では、廃絶後に板碑が投棄された状況が確認された。

高崎市文化財調査報告書第339集

宿大類村西遺跡2

— 建売分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成26年10月20日印刷

平成26年10月31日発行

編集 / 有限会社 毛野考古学研究所

発行 / 有限会社 毛野考古学研究所

印刷 / 朝日印刷工業株式会社

